

---

# ジャガイモ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジャガイモ

### 【Nコード】

N5404N

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ドイツに来てジャガイモばかり食べている日本人の兄弟。いい加減嫌になってきたがジャガイモの歴史を聞いて。ドイツではジャガイモは主食です。

## 第一章

ジャガイモ

ここはドイツである。ドイツといえばだ。

「またジャガイモ!？」

「今日もジャガイモって」

髪が黒く黄色い肌の二人の子供達がテーブルの前のそれを見てうんざりとした顔になっている。見ればジャガイモ料理がこれでもかと置かれている。

「他にはないの!？」

「そうよ、食べ飽きたよ」

「そうよね」

「仕方ないじゃない。ドイツなんだから」

二人の母親は少し怒った顔でこう言った。

「ジャガイモばかりなのも」

「何で仕方ないの？」

「それで」

「ドイツはジャガイモを食べる国なの」

だからだというのである。

「パンと同じよ」

「そういえばパンもだよね」

「黒パン多いけれど」

「白いパンも食べるけれど」

「それでも黒パン多いよね」

「ドイツは黒パンの国でもあるの」

このことも話すのだった。しかしそれ以上にこう言うのであった。

「けれどそれ以上にね」

「ジャガイモなんだ」

「それなんだ」

「そうよ。わかつたら食べなさい」

また子供達に対して言う。

「いいわね」

「はい」

「わかつたよ」

子供達は嫌々ながら母親の言葉に頷く。

「たまには御飯が食べたいけれど」

「日本人だしね」

「お米？あるじゃない」

母親はそれについてはしれっとした感じで述べた。

「ちゃんとね」

「あれだけじゃない、いつも何かつけ合わせみたいに出るだけで」

「それもたまに」

「ここじゃお米は野菜扱いなの」

欧州全体がそうである。リゾットのイタリアにしてもパエリアのスペインにしてもだ。どちらもスープの扱いでありやはりパンが主食だ。

「だからなのよ」

「しかも何か粘りがないし」

「日本のお米じゃないし」

しかもだった。米自体もそうなのだった。

「日本のお米食べたいよね」

「お握りとかね」

「だから。ここはドイツなの」

またこのことを言う母親だった。

「わかつたらジャガイモを食べなさい」

「それとこれだよね」

「ソーセージにザワークラフトも」

「そうよ、早く食べなさい」

こんなやり取りだった。子供達はまずは家でジャガイモを食べる。

そしてそれは学校でも同じだった。やはりジャガイモばかりであった。

「何でこんなにジャガイモ多いの？」

「ドイツってジャガイモの国なの？」

「って何言ってるんだよ」

「そうだよ」

同じクラスで食べている二人に対して周りの金髪の子供達が言う。実は彼等は双子なのだ。名前を飯田幸一、幸二という。二人の名前はそれぞれ二人の父親が自分の好きなプロ野球選手から名付けた。田淵幸一と秋山幸二だ。彼が阪神とダイエー、今はソフトバンクが好きだからである。二人はこの父親の転勤でドイツに来ているのである。

「ジャガイモ美味しいじゃない」

「そうよね」

「こんな美味しいものないわよ」

「けれどさ」

「そうだよね」

しかし幸一と幸二はそれでも言うのだった。

「ジャガイモばかりだし」

「パンより沢山食べてるけれど」

「あれっ、おかしい？」

「おかしくないわよね」

「そうだよね」

しかしドイツの子供達はこう言っばかりである。尚ここはバイエルンである。そのミュンヘンの学校に通っているのである。

## 第二章

「ジャガイモはパンと同じだよ」

「こうして沢山食べるものよ」

「日本じゃ違うらしいけれど」

「ううん、そうなんだ」

「だからいつも出て来るんだ」

二人もその話を聞いて述べた。

「朝も昼も晩も」

「こうして」

「美味しいよね」

「色々な料理にも使えるし」

「そうそう」

そんな話をしながらだった。ドイツの子供達は笑顔でジャガイモを食べていく。それは幸一と幸二にとっては信じられないことだった。

そして勿論家に帰ってもである。アイスバインに野菜スープはあった。そしてパンも。しかしまたしてもジャガイモがあるのであった。

「まただし」

「本当に朝昼晩って」

「だから。ドイツなのよ」

母親はまた少し怒った顔で子供達に言う。

「だったら当然じゃない」

「ううん、もう飽きたよ」

「ジャガイモばかりさ」

「お米じゃないし」

「サツマイモはないの？」

「ある訳ないじゃない」

サツマイモについてはまさに即答だった。

「ここはドイツよ」

「だからなの？」

「サツマイモは」

「ドイツはジャガイモ」

母はこのことを殊更強調して言ってきた。

「サツマイモはないの」

「何か寂しいよね」

「そうだよね」

幸一と幸二は母の言葉を聞いて残念な顔になっていた。

「サツマイモ美味しいのに」

「それがないなんて」

「だからないから」

それをまた言う母だった。

「折角ドイツ語がわかるのにドイツに馴染みなさい」

「けれど。ジャガイモばかりだから」

「それが」

「とにかく食べなさい」

今度は一も二もない言葉だった。

「わかったわね」

「はい、じゃあ」

「食べるから」

二人は不平を感じながらもそのジャガイモを食べるのだった。とにかくドイツはジャガイモだった。それと肉とキャベツであった。

「昨日はアイスバインで今日はステーキ？」

「物凄いね、これって」

幸一と幸二は夕食を前にして驚いていた。

「今日の給食もソーサー山盛りで物凄い量のキャベツで」

「それでまたジャガイモだったけれど」

「バイエルンだからなあ」

今日の夕食は父も一緒だった。眼鏡をかけて黒い髪をオールバックにしている。何処か銀行員めいた知的な趣の外見である。

「やっぱりそれも当然だろ」

「お肉。すごい量よね」

母もそれを言う。

「ほら、あのシュバインスハクセ」

「ああ、あれか」

父は妻のその言葉に頷いて応える。

「あれも凄いよな」

「殆ど漫画のお肉だったじゃない」

「そうだよな。最初見た時本気でそう思ったよ」

「本当にね」

「ああ、それにな」

彼の言葉は続く。

「肉団子のスープだってな」

「ハンバーグの大きなものが中に入ってるみたいだね」

「本当に凄いよな、ここは」

「それにビールも」

やはりこれは欠かせない。ドイツといえばビールである。

「皆凄い飲むよな」

「朝から飲んでるし」

母は言いながら首を傾げさせていた。そのうえでの言葉だった。

### 第三章

「ほら、黒ビールの中に卵を入れて」

「ああ、それで飲んでるよな」

「あれも凄くない？」

「いや、最初見て驚いたよ」

夫婦でドイツの食生活についてあれこれと話す。

「それが朝御飯なんだからな」

「朝からビールね」

「それがこつちじゃ普通なんだな」

「そうね」

首を傾げさせながらの話であった。

「けれど私達はね」

「こんなにお肉にビールばかりで大丈夫かな」

「気をつけないといけないわね」

「ああ、そうだな」

「ところでさ」

「いい？」

その二人に幸一と幸二が声をかけてきた。

「一つ聞きたいけれど」

「どうかな」

「何だい？」

「どうかしたの？」

「お肉はわかったけれど」

「ビールも」

二人はそれはわかるというのだった。しかしである。

「それでもまたジャガイモ？」

「これジャガイモだよな」

「ええ、そうよ」

母は丸く弾力のあるそれをフォークで刺しながら母に問う。母もすぐに言葉を返してきた。

「小麦粉と一緒に練ったのよ」

「またジャガイモなんだ」

「本当に朝昼晩って」

「普通よね」

「ドイツだからな」

母も父もそれぞれ顔を見合わせて話をする。二人は既にドイツといえばジャガイモだと。頭の中で完全に納得してしまっているのだ。つた。

そしてだ。そのうえで子供達に対して言うのだった。

「いいじゃない。美味しいでしょ？」

「ジャガイモ嫌いか？」

「嫌いじゃないけれど」

「それでもジャガイモばかりだから」

二人が言うのはこのことだった。

「ねえ、飽きない？」

「いい加減に」

「飽きないように料理してるわよ」

「そうだよな」

だが両親はこう二人に返すのだった。

「ほら、今日はそれだし」

「昨日はマツシユポテトだったしな」

「結局ジャガイモなんだね」

「そればかりなんだ」

「とにかく食べなさい」

「いいからな」

今日は結構強引に食べさせられた。それはこの日だけでなくとにかく来る日も来る日もジャガイモばかりだった。二人は辟易さえしていた。

それで二人になるとだ。うんざりとした顔で話をするのだった。

「またジャガイモなんだろうね」

「それしかないしね」

「何だよ、ドイツって」

「パンより食べてるじゃない」

こう話してうんざりとした顔になるのであった。

「朝も昼も晩もってね」

「何かってというとジャガイモで」

「何でこんなにジャガイモばかりなんだろうね」

「訳わからないよ。パンより多いじゃないか」

こんな話をする日々だった。そしてある日である。彼等は学校の図書館に入った。そしてそこで本を読んでいた。ドイツ語であるがそれどわかるのだ。

## 第四章

その中でだ。ふと幸一がある本を見つけてきたのだ。それは。

「あつ、これって」

「どうしたの？」

「ほら、この本」

こう言つて幸二にもその本を見せたのだった。

「見て」

「あれっ、歴史の本なんだ」

「うん、絵本だよ」

それは一冊の絵本だった。ドイツ語でこう書かれていた。

「王様とジャガイモ？」

「またジャガイモ？」

幸二はジャガイモの文字を読んでうんざりとした顔になった。

「本当にジャガイモばかりだよね、ドイツって」

「そうだね。けれどこの本面白そうだよ」

幸一は本能的にこのことを悟つて言つてきた。

「どう？読む？」

「そうだね。読んでみようよ」

「うん、それじゃあ」

こう話してであつた。二人で席に着いてその絵本を読み出した。

底には王様が国民のお腹を一杯にする為にジャガイモを食べさせる

話だった。

「ふうん、ジャガイモをね」

「あんなの幾らでも食べられるじゃない」

二人は読みながらまずはこう思った。しかしそれは違つていた。

読んでいくうちにだ。二人はわかつてきた。

「皆最初はジャガイモ食べなかつたんだ」

「気持ち悪いとか言つて」

「それで王様は考えて」

「貴族しか食べるなって言ったんだ」

話を読んでいくうちにその流れがわかってきたのだ。

「それでなんだ」

「それで貴族の人しか食べちゃいけないって言って」

「そうして食べさせたなんて」

「考えたんだね」

二人はその話を読んであらためて思ったのだった。

「それで食べてみたら美味しくて」

「凄い勢いで広まったんだ」

「それがジャガイモだったんだ」

二人はそのことも知った。そして。

その話を両親にしてみた。するとだった。

「ああ、そのお話はね」

「本当のことだぞ」

こう言うのだった。

「それはこの国の王様の話で」

「フリードリヒ大王の話だな」

「フリードリヒっていったら」

「どっかで聞いたよね」

幸一と幸二も聞いたことのある名前だった。

## 第五章

「確か物凄く偉い王様？」

「戦争に強くてしかもドイツを強くしたっていう」

「そうよ、その王様よ」

「その王様がしたことなんだ」

両親はまた二人に話した。

「それでそのジャガイモを食べてね」

「今のドイツがあるんだ」

「今のドイツがあるって」

「ジャガイモのおかげで？」

二人はその言葉を聞いてそれぞれの目をしばたかせた。二人にとつてはそれがどうしてなのかわかりかねることであった。しかしだ。両親はここだ。このことも話したのである。

「ドイツはその時貧しくてね」

「食べ物がいり足りなかったんだ」

「パンがあつたんじゃないの？」

「そうだよ」

二人はその話を聞いてまずはこう述べた。

「パンがね」

「あつたんじゃないの？」

「パンを作る小麦がいり足りなかったのよ」

「ドイツではな」

これは実は欧州全体がそうであったのだが二人はそれは言わなかった。欧州は寒冷で米もあまり採れはしない。必然的に貧しい場所になるのだ。

「それでジャガイモを植えてね」

「それで食べたんだよ」

「そうだったんだ、それでジャガイモを」

「食べるようになったんだ」  
二人もこれでわかった。ジャガイモとドイツのことがだ。  
「それで皆ジャガイモを食べて」  
「お腹一杯になったんだ」  
「そうよ。それで人も増えてね」  
「ドイツの今があるんだ」  
両親は子供達にこうも話した。  
「ドイツはジャガイモでドイツになったのよ」  
「その通りなんだ」  
「そうだったんだ。ジャガイモってそんなに大事だったんだ」  
「今まで何ともないと思っていたのに」  
「飽きる位食べていたけれど」  
「そんなに大切なものだったんだね」  
二人はそのことがわかった。そうしてだった。  
「じゃあお父さん、お母さん」  
「いいかな」  
二人はあらためて両親に言ってきた。  
「今日もジャガイモいいかな」  
「食べていい？」  
「ええ、勿論よ」  
「用意してあるからな」  
両親はにこりと笑って二人に応えてきた。  
「今日はジャガイモを煮てバターをつけて食べるから」  
「それとジャガイモのパンケーキだぞ」  
「それとキャベツのスープにソーセージ」  
「パンもあるからな」  
「よし、じゃあ食べるか」  
「そのジャガイモをね」  
二人は両親の言葉を聞いて笑顔で述べた。  
「じゃあ皆で食べよう」

「うん、これからもずっとね」

「そうよ、ドイツを食べなさい」

母が二人に言う言葉はこれだった。

「いいわね、たっぷりだね」

「うん」

「それじゃあね」

二人も応えてであった。そのドイツを食べるのだった。それは前よりも遥かに美味しいものだった。ドイツの味がそこにあった。

ジャガイモ 完

2010・4・7

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5404n/>

---

ジャガイモ

2010年10月8日11時47分発行